

あけのほし 2015 年 1 月

「新たに生まれる」

菊田行住

「イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができるでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」

イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

(ヨハネによる福音書 3 章 3 - 8 節)

「目から鱗が落ちる」という言葉があります。それは、今まで分らなかったことが、あることをきっかけに急に理解できるようになるという意味です。その時、私たちの存在は、それまでとは違った、何か別のものに生まれ変わったかのような感覚に至ることがあると思います。世界がまるで違って見えるその感覚は、世界が変わってしまったのではありません。変化したのは、自分の視点の方であります。

以前何かで読んだ文書に、このようなものがありました。あるマラソン選手の話でしたが、その人はこのレースが現役最後だというとき、それまで経験したことのない不思議な感覚にとらわれたとのこと。それまで見ていた風景と違い、沿道で声援を送っている人々の表情や、移り変わって行く景色の様相などが鮮明に見えてきました。今まではいかにタイムを縮めるか、レースの勝敗に関することにだけに焦点が合っていたのが、体力も落ち、若い人から比べればこれからタイムが縮まる要素がなくなった今となっては、自分に対する期待も、正直なところ失ってしまっているわけです。そのような場合には、それまで自分が見ていたところとは違ったところが、見えて来るようになったというわけです。

負けを認め、弱さを認めることができたとき、私たちはそれまで見ていた風景とは違ったものが見えてきます。それは、勝っていたとき、強かったときに見ていた景色に劣るといふことはありません。それどころか、それまで見えていなかった繊細できめ細やかな部分が見えてくるということが起こります。それまで、誰かの役にたつように、自分が何者かにならねばならないという一心で生きて来たのが、誰かの世話にならなくてはダメで、何者にもなれないという事態に遭遇したときに、私たちは生まれ変わるチャンスを頂くこととなります。それは、言い換えれば、見ている視点の刷新の時です。

例えば、野山を散策して行くとき、人々が往来する道ばたに生息している草花は、多くの人々に見てもらい、その美しさに感嘆の讚美を受けることとなります。しかし、一方で

誰も行き交うことのない山深い場所でひっそり生えている草花は、そのような他者からの栄誉を受けることはありません。そこで、この両者のどちらの方がより価値のある存在なのかと比べてみたところで、たいして意味はないと思います。なぜなら自らの存在価値を評価する視点が、他者にとってどうかというものである以上、私たちは本当の意味で安定した、絶対的な評価を獲得することはできないからです。人の目にどう映るかによって左右される価値というのは、移ろいやすくはかないものです。誰かの役に立って初めて、自らの生きている意義が見いだせないようでは、いずれ役に立たなくなる時が訪れることを恐れなくてはなりません。ですからそのことを受け入れることが出来るときというのが、まさに負けたとき、自らの弱さを認めることができたときなのだということが言えるでしょう。

私たちが人間による評価によって存在意義を計る以上、安定したこの世界に存在して行くための意義を見出すことはできないでしょう。人間の評価に左右されるのではなく、変わることのない絶対的な存在することの意味が私たちには必要なのです。イエスさまはここで、ニコデモとという人物に、新たに生まれなければ神の国を見ることはできない、入ることは出来ないと答えられました。それは、どういうことかと言いますと、神の国というのは、神さまによって為されている御支配、あるいは統治の現実のことを言っているのですが、それはすべてのものをこの世界に存在たらしめているのが神さまの霊におけるお働きによるものだということです。ですから、たくさんの人々が驚嘆する草花であろうと、ひっそり咲いて誰にも評価されない草花であろうと、神さまのお働きはどちらにも及んでいて、それらを生かそうという御意志には、何の変わりもないのだということです。私達人間が優劣を決める価値観とは別に、神さまの絶対的な存在させることへの思いがそこにはあるのです。神さまは、私たちが役にたちそうだから生かしているわけでもありませんし、役に立たないから生かすのを止めるのではありません。どのいのちも神さまが心から欲して生かしているいのちであることに変わりはありません。この神の国の現実には、私たちの見方を合わせない限り、神の国を見ることもできませんし、その中に自分にとって意味あるものとして入ることは出来ないのだというわけです。

このイエス・キリストの言葉に応答する手段として、「洗礼」という行為があります。これは、古いそれまでの自分に死んで、新しく生まれ変わることを起こさせます。言ってみれば、それまで、私という人間の視点で世界を見て生きて来た自分を一旦終わらせて、これからは神さまが見ている視点に生まれ変わって生きて行くおり方に変容するというのが言えるでしょう。私たちの真の存在意義は、私たちによる相対評価の中にはありません。変わることのない、すべてのいのちを存在たらしめる神さまによる絶対評価の中に、それはあるのです。その神さまの懐の中に飛び込んだとき、私たちは真の安定と自由による喜びに至ることができるのだというわけであります。